

(肝属郡根占町横別府字谷添)

位置と環境

谷添遺跡は町役場から東へ約7kmのところであり、横別府の火山灰台地上に位置している。この台地の南には辻岳・野首岳を主峰とする辻岳山塊が南西に延びる。

この火山灰台地は、阿多溶結凝灰岩からなる急崖をなし、その周辺部には伊戸火砕流堆積物が部分的に堆積し、丘陵・小台地を形成している。

本遺跡は、標高約230～240mの馬の背状で南へ延びる台地の東側の斜面に立地し、台地の最も高い標高は246mを測る。遺跡のある台地から直接臨むことはできないが、雄川の支流である赤瀬川が南側を東流し、ついで大きく蛇行しながら東側を北流する。

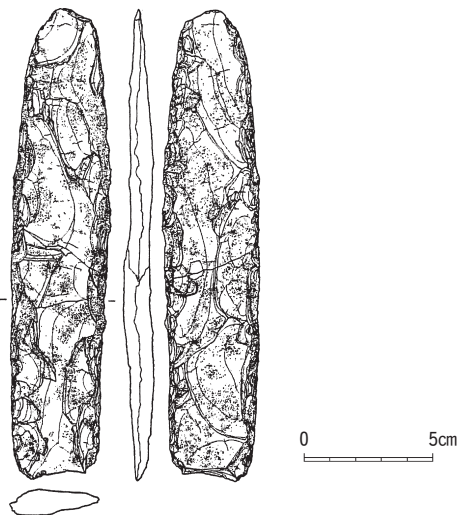
調査の経緯

遺跡は、九州農政局『国営総合農地開発事業肝属南部地区』の事業実施に伴い工事計画区域内に土器の散布が確認され、町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、平成3年11月に確認調査を実施した。

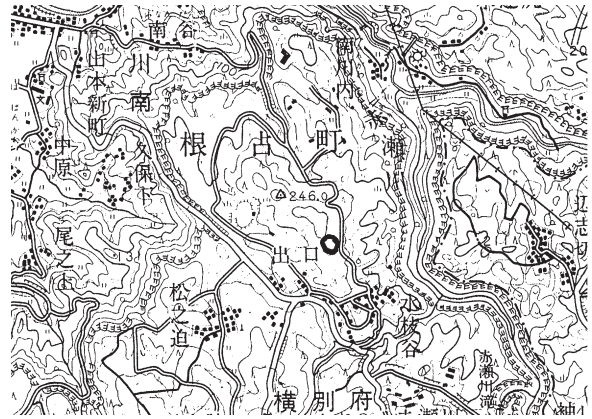
この結果、関係者の協議により工事着手前に本調査を実施することとなり、平成10年に調査(1,118㎡)を実施した。

遺構と遺物

本遺跡からは2軒の竪穴住居跡と6基の土坑が検



第2図 石槍状石器実測図



第1図 谷添遺跡の位置

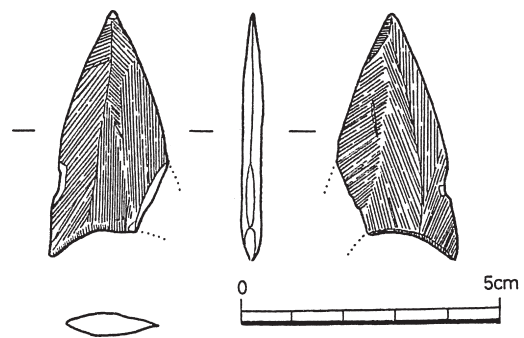
出された。土坑は略楕円形状の平面プランをもつものが、比較的まとまって検出されたという点を確認した。このような遺構の検出状況は、今後の弥生集落を検討する上での一材料としたい。

2軒が検出された竪穴住居跡は、平面形が正方形(1号)と長方形(2号)を呈するものであるが、いずれも2本の主柱をもつ住居跡と考えられるものである。

1号竪穴住居跡からは総数1310点の遺物が出土した。この住居跡の埋土状況からは以下のようないくつかの段階が想定され興味深い資料となった。

①竪穴住居が構築される→②竪穴住居で生活する→③竪穴住居が廃棄される→④竪穴住居跡内の壁際を中心にある程度土が埋まる→⑤竪穴住居跡の凹地を利用して磨製石鏃の製作が行われる→⑥竪穴住居跡の凹地に開聞岳の噴出物(暗紫ゴラ)が堆積する→⑦竪穴住居跡の凹地を利用して磨製石鏃の製作が行われる?→⑧住居跡が完全に埋没する

このように竪穴住居と磨製石鏃製作との関係が推



第3図 磨製石鏃実測図

察できる。

遺物としては弥生時代中期中葉から後葉を中心とする山ノ口式土器が出土している。

石器には磨製石鏃、磨製石斧、磨石、紡錘車、砥石などが出土している。

特徴

本遺跡出土遺物の最大の特徴は、磨製石鏃およびそれに関連する遺物が大量に出土したということにつきる。また、1号竪穴住居跡内の床面からは全長18.3cmの打製石槍状石器も出土した。弥生時代このような石器は、近畿地方や中部瀬戸内地方の中期後半を中心に出土する遺物である。

本遺跡は、標高240m弱の台地縁辺部に立地している。遺跡の東側は比較的急な斜面を形成しており、かなり眺望の開けた場所である。多量の磨製石鏃、あるいは近畿地方や中部瀬戸内を中心として出土する打製石槍状石器の出土などから、いわゆる高地性集落との関連が考えられるが、当時の状況を普遍化して語るにはまだまだ資料に乏しい。即結びつけて考えるのは早計であろう。ただ、少なくとも西日本

の一部の地域にある種の緊張状態があったという事実は意識する必要があるものとする。

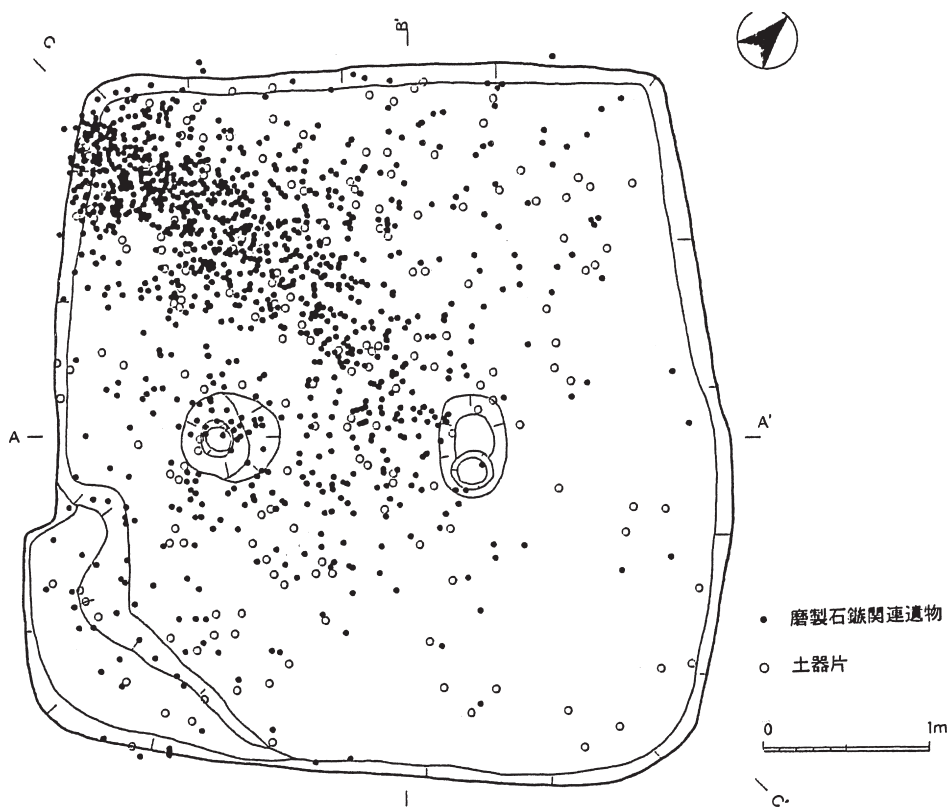
資料の所在

出土遺物は、根占町教育委員会に保管されている。

参考文献

根占町教育委員会2000「谷添遺跡・出口遺跡」『根占町埋蔵文化財報告書』10

(下大川司)



第4図 竪穴住居跡内遺物出土状況